

2. 野菜の施肥

1. <u>キュウリ（促成、半促成、抑制）</u>	13
2. <u>キュウリ（夏秋）</u>	13
3. <u>丸トマト（促成、夏秋、抑制）</u>	14
4. <u>ミニトマト（促成、抑制）</u>	15
5. <u>ナス（促成、夏秋）</u>	15
6. <u>ピーマン（夏秋）</u>	16
7. <u>イチゴ（促成）</u>	17
8. <u>タマネギ</u>	18
9. <u>小ネギ（周年）</u>	19
10. <u>根深ネギ（春まき）</u>	19
11. <u>ワケギ</u>	20
12. <u>アスパラガス（ハウス）</u>	21
13. <u>ハクサイ（冬どり）</u>	21
14. <u>チンゲンサイ（周年栽培、施設）</u>	22
15. <u>キャベツ（冬どり、秋どり）</u>	23
16. <u>ブロッコリー（早出し・普通）</u>	23
17. <u>レタス（夏秋、冬春）</u>	24
18. <u>ホウレンソウ（雨よけ）</u>	25
19. <u>バレイショ</u>	25
20. <u>ショウガ</u>	26
21. <u>サトイモ</u>	26
22. <u>カンショ（早掘、普通）</u>	27
23. <u>レンコン</u>	27
24. <u>スイートコーン（普通、トンネル）</u>	28
25. <u>エンドウ（普通、露地抑制）</u>	29
26. <u>ソラマメ（普通）</u>	29
27. <u>モロヘイヤ（秋冬・春夏）</u>	30
28. <u>パセリ（夏秋）</u>	30
29. <u>コマツナ（雨よけ）</u>	31
30. <u>スイカ（半促成、露地）</u>	32
31. <u>メロン（半促成）</u>	32
32. <u>カボチャ（抑制、トンネル、普通）</u>	33
33. <u>インゲン（抑制・半促成）</u>	33
34. <u>ニンニク（普通）</u>	34

2 野菜の施肥 [\[目次に戻る\]](#)

この施肥量は従来の主要野菜施肥量を土台に、九州地区野菜肥料研究会の基準、新産地の基準、試験結果を加味して設定したものであり各地区において気象、土壌、耕種法等が異なる場合には、この施肥量を参考にして地区毎に施肥設計をたてること。

◎ 施肥量を設定した作物の作型と主要品種

品 目	作 型	播 種 期	定 植 期	収 穫 期	ページ
1 キュウリ	抑 制	7月上旬～ 8月下旬	8月上旬～ 9月下旬	8月下旬～ 1月下旬	13
	促 成	9月上旬～ 10月上旬	10月上旬～ 11月下旬	11月上旬～ 6月下旬	
	半 促 成	10月下旬～ 12月下旬	12月上旬～ 2月中旬	1月上旬～ 6月下旬	
2 キュウリ	夏 秋	6月上旬～ 7月上旬	6月下旬～ 7月下旬	7月中旬～ 11月上旬	13～14
3 丸トマト	抑 制	7月下旬	8月下旬～ 9月上旬	10月～1月	14～15
	促 成	8月上旬～ 下旬	9月中旬～ 10月下旬	12月中旬～ 6月	
	夏 秋	4月上旬	5月中旬～ 下旬	6月下旬～ 11月中旬	
4 ミニトマト	抑 制	6月中旬～ 下旬	7月下旬～ 8月上旬	9月中旬～ 12月	15
	促 成	7月下旬～ 8月上旬	9月中旬～ 10月上旬	11月中旬～ 6月	
5 ナス	夏 秋	2 月 下 旬	5 月 上 旬	6月下旬～ 10月	15～16
	促 成	7月上旬～ 中旬	8月下旬～ 9月下旬	10月下旬～ 6月	
6 ピーマン	夏 秋	3月上旬	5月上旬	7月上旬～ 11月上旬	16～17
7 イチゴ	促 成	採苗6月上旬 ～7月下旬	9月上旬～ 下旬	11月中旬～ 6月	17～18
8 タマネギ	ト ン ネ ル	9月中旬	11月上旬	3月	18
	早 生	9月下旬	11月中旬	4月～ 5月上旬	
	中 晩 生	9月中旬～ 下旬	11月下旬～ 12月上中旬	5月中旬～ 6月上旬	
9 小ネギ	夏 秋	5月～9月	—	7月～12月	19
	冬 春	10月～4月	—	1月～6月	

品 目	作 型	播 種 期	定 植 期	収 穫 期	ページ
10 根深ネギ	春 播 き	3 月～4 月	6 月～7 月	10月～12月	19～20
11 ワ ケ ギ	夏 ど り		5 月下旬～ 9 月上旬	7 月上旬～ 11 月上旬	20
	冬 ど り		9 月上旬～ 12 月中旬	11 月中旬～ 3 月下旬	
12 アスパラガス	ハ ウ ス	2 月上旬	5 月上旬	1 月上旬～ 10 月	21
13 ハクサイ	冬 ど り	8 月下旬	—	1 月～3 月	21～22
14 チンゲンサイ	周 年	—	—	—	22～23
15 キャベツ	秋 ど り	8 月下旬～ 中 旬	9 月上旬～ 中 旬	11 月～12 月	23
	冬 ど り	8 月下旬～ 9 月上旬	9 月下旬	12 月～2 月	
16 ブロッコリー	早 出 し	7 月上旬～ 中 旬	8 月中旬～ 下 旬	10 月上旬～ 1 月上旬	23～24
	普 通	8 月上旬	9 月下旬	11 月下旬～ 4 月中旬	
17 レタス	夏 秋	3 月 8 月～9 月	4 月 9 月～10 月	6 月 10 月～11 月	24
	冬 春	8 月下旬～ 10 月上旬	9 月下旬～ 3 月	12 月上旬～ 5 月	
18 ホウレンソウ	夏 秋 雨 よ け	3 月上旬～ 10 月中旬	—	5 月上旬～ 11 月上～下旬	25
19 バレイショ	春	—	1 月下旬	5 月下旬～ 6 月上旬	25～26
	秋	—	8 月下旬～ 9 月上旬	11 月～12 月	
20 ショウガ	—	—	5 月上旬	9 月～11 月	26
21 サトイモ	—	—	4 月上旬	9 月～12 月	26～27
22 カンショ	早 マ ル 堀 チ	2 月上旬	4 月上旬～ 5 月下旬	7 月中旬～ 9 月下旬	27
	普 通	3 月上旬	5 月中旬～ 6 月下旬	10 月上旬～ 11 月中旬	
23 レンコン	ハ ウ ス	—	2 月下旬～ 3 月上旬	6 月～8 月	27～28
	—	—	3 月下旬～ 4 月中旬	8 月～4 月	

品 目	作 型	播 種 期	定 植 期	収 穫 期	ページ
24 スイート コーン	ト ン ネ ル	3月下旬	—	6月上旬～ 6月中旬	28
	普 通	5月上旬	—	8月上旬～ 8月中旬	
25 エンドウ	普 通	10月中旬	—	4月下旬～ 5月下旬	29
	露 地 抑 制	8月上旬	—	10月上旬～ 12月下旬	
26 ソラマメ	普 通	10月中旬	11月上旬	5月上旬～ 5月下旬	29
27 モロヘイヤ	秋 冬	9月	10月上旬	11月～3月	30
	春 夏	2月～3月	3月～4月	4月～7月	
28 パ セ リ	夏 秋	2月～3月	4月～5月	6月～2月	30～31
29 コマツナ	雨 よ け	周年	—	周年	31
30 ス イ カ	半 促 成 、 露 地	1月上旬～ 3月上旬	2月下旬～ 4月上旬	5月～8月	32
31 メ ロ ン	半 促 成	1月上旬～ 2月中旬	2月上旬～ 3月上旬	5月下旬～ 7月上旬	32～33
32 カボチャ	ト ン ネ ル	2月下旬	4月上旬	6月中旬～ 8月上旬	33
	普 通	3月中旬	4月下旬	7月上旬～ 8月上旬	
	抑 制	8月中旬	—	11月上旬～ 中旬	
33 インゲン	抑 制	8月	—	10月～11月	33～34
	半 促 成	2月	—	4月～6月	
34 ニンニク	普 通	—	9月中旬～ 10月上旬	5月中旬～ 下旬	34

1. キュウリ（促成、半促成、抑制）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……佐賀平坦、天山松浦、杵島山麓、国見山麓、白石平坦、多良岳
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 抑 制：6,000kg 半促成：15,000kg 促 成：18,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 合理的な施肥の実施にもとづき、極端な多肥とこれに起因した各種障害の除去
 - (2) 緩効性肥料の有効利用や、灌水と液肥の併用による施肥労力の節減
- 5) 施肥量（促成）

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	根 付 肥	追 肥
窒 素	55kg	27.5kg	2kg	1 回当たり 2 ～ 3 kg で 15 ～ 20 日間隔で施用
リ ン 酸	30	27	3	—
カ リ	45	24	—	1 回当たり 2 ～ 3 kg で 15 ～ 20 日間隔で施用
施 用 期	—	定植10日前	定植前日	—

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 好適 pH6.0～6.5
 - (2) 浅根性のため、元肥は深さ 15 cm内外の全面全層に施用する。
 - (3) 生育期間が長いため、元肥は緩効性肥料が望ましい。
 - (4) 3 月以降に加里欠乏が発生しやすいので、半促成作型への切り替え前にも土壌分析を行い、不足養分を確実に補給すること。
 - (5) 二作型を行う場合の元肥はハウス抑制で 30%減、半促成では 20%減として施用する。
 - (6) 肥効調節型肥料を用いた、2 作一発型施肥が可能である。

2. キュウリ（夏秋）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……天山松浦、佐賀平坦
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 8,000kg
- 4) 改善目標

夏期高温期の長期間、根群機能を維持するため、腐熟有機物の施用と有効土層を深くし、排水性・保水性をよくする。

5) 施肥量（雨よけ）

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥		
			1 追	2 追	3 追
窒 素	40kg	20kg	6kg	8kg	6kg
リ ン 酸	30	30	—	—	—
カ リ	25	12	4	5	4
施 用 期	—	播種10日前	収 穫 始	1 追後 1 ヶ月	2 追後 1 ヶ月

6) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH6.0～6.5
- (2) 施肥後土壌の過乾燥を防止する。

3. 丸トマト（促成、夏秋、抑制）[\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……佐賀北部、天山松浦（夏秋）

佐賀平坦、天山松浦、国見山麓（促成、半促成）

佐賀平坦、白石平坦、上場（促成、ハウス抑制）

2) 土 壌……砂壤土～埴土

3) 収量目標……10 a 当たり丸トマト（促成 12,000kg、半促成 9,000kg、抑制 9,000kg）

4) 改善目標

花芽の充実をはかるための育苗につとめ若苗定植をさける。

その他キュウリに同じ。

5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	夏 秋（雨よけ）			促 成			抑 制		
	総 量 (成分)	元 肥	追 肥	総 量 (成分)	元 肥	追 肥	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	32kg	15kg	17kg	39kg	18kg	21kg	25kg	9kg	16kg
リン酸	25	25	—	25	25	—	20	20	—
カ リ	32	15	17	39	18	21	25	9	16
施用期	—	定 植 15日前		—	定 植 10日前		—	定 植 10日前	

6) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH6.0～6.5
- (2) 好石灰作物であるため、pHの矯正を必ず行なっておく。
- (3) 深根性のため全層施肥がのぞましい。
- (4) 生育期間が長い元肥は緩効性肥料が望ましい。
- (5) 埴土及び砂壤土では本施肥量の 10%増とする。

- (6) 尻ぐされ予防のため、葉面散布剤（石灰）の施用を行なう。
- (7) 追肥は3段花房開花期から2週間毎に1回当たりN成分で1kg前後でやる。
- (8) 専用の肥効調節型肥料を用いた全量元肥栽培では、窒素成分量の15%程度が削減可能である。

4. ミニトマト（促成、抑制）[〔目次に戻る〕](#)

- 1) 地 域……県内平坦全域
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10a 当り 促成 9,000kg、半促成 7,000kg、抑制 5,000kg
- 4) 改善目標……根いたみのない充実した苗に仕上げる。
その他キュウリに同じ。
- 5) 施 肥 量

(10a)

区 分	促 成			抑 制		
	総量（成分）	元 肥	追 肥	総量（成分）	元 肥	追 肥
窒 素	39kg	19kg	20kg	28kg	13kg	15kg
リ ン 酸	28	28	—	20	20	—
カ リ	39	19	20	27	12	15
施 用 期	—	定 植 10日前		—	定 植 10日前	

6) 施肥設計上の要点

- (1) 追肥は、3段果房着果後から20日に1回程度に、遅れないように1回当たり窒素成分で1.5～2kgを施用する。
その他は丸トマトに同じ。

5. ナス（促成、夏秋）[〔目次に戻る〕](#)

- 1) 地 域……佐賀平坦（促成） 佐賀北部山間（夏秋） 白石平坦（促成）
天山松浦（促成、半促成） 国見山麓（促成）
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10a 当たり 15,000kg（促成）、8,000kg（夏秋）
- 4) 改善目標
立地条件とナスの発育相や養分吸収の実態に適応した合理的な施肥と土壌管理を行い諸障害を防止して良品を増収する。

5) 施肥量

(10a)

区 分	促 成			夏 秋 (露地)		
	総量 (成分)	元 肥	追 肥	総量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	70kg	30kg	1 回当たり3 kg以内とする	50kg	25kg	1 回当たり3 kg以内とする
リ ン 酸	30	30		25	25	
カ リ	45	20	1 回当たり3 kg以内とする	35	20	1 回当たり3 kg以内とする
施 用 期	—	定植前 10～20日	—	—	定植前 10～20日	—

6) 施肥設計上の要点

- (1) 土壌病害を防ぎ、諸病害を回避するため接木栽培を行う。
- (2) 生育期間が長期におよぶので根群の機能を高め草勢を維持するように排水を促進し高畦づくりとする。
- (3) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (4) 好適 pH6.0～6.5、EC施肥前 0.3ms 以下 生育中 0.7ms
- (5) 窒素の肥切れと乾燥は禁物で、元肥には緩効性肥料を主体に追肥は速効性肥料や液肥を利用する。特に乾燥時の灌水は効果が高い。
- (6) ナスは多肥となるので1回の施肥量に注意し、濃度障害と低温期のアンモニアガス障害を予防する。
また、苦土欠乏症が多いので、カリの多施をさけ、発生時は苦土剤の葉面散布を行う。
- (7) 連作ハウスでは、土壌分析に基づいて元肥量を決定する。
- (8) 専用の肥効調節型肥料を用いた全量元肥栽培での窒素成分量は15%程度が削減可能である。

6. ピーマン (夏秋) [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……佐賀北部山間、天山松浦、国見山麓
- 2) 土 壌……埴壌土～埴土
- 3) 収量目標……10a 当たり 7,000kg
- 4) 改善目標

立地条件とピーマンの発育相や養分吸収の実態に適応した合理的な施肥と土壌水分管理を行ない着果障害を防止して良質品を増収する。

5) 施 肥 量 (雨よけ)

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥				
			1 追	2 追	3 追	4 追	5 追
窒 素	40kg	20kg	4kg	4kg	4kg	4kg	4kg
リ ン 酸	35	35	—	—	—	—	—
カ リ	40	20	4	4	4	4	4
施 用 期	—	定植10日前	定植30日後	1追30日後	2追20日後	3追20日後	4追20日後

6) 施肥設計上の要点

- (1) 生育期間が長いので根群の機能を高め草勢を維持するため、ほ場の排水を図ると同時に乾燥期の保水性をよくする。
- (2) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (3) 好適 pH6.0～6.5
- (4) 作畦後乾燥防止のためマルチ又は敷ワラを行う。
- (5) 石灰欠乏症状の発生初期に石灰資材の葉面散布を行う。

7. イチゴ (促成) [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……壤土～埴壤土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 4,000kg
- 4) 改善目標

濃度障害に弱いので元肥の種類の選択と施用法に注意する。

5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	25kg	5～10kg	1回当たり2kg以内とする
リ ン 酸	21	21	
カ リ	18	11	1回当たり2kg以内とする
施 用 期	—	植付15日以上前	—

注) 土耕起栽培及び高設栽培の場合。

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。ワラ類を施用する場合は、腐熟を進め過乾燥を防ぐため、除塩を開始する前に施用しておく。
- (2) 好適 pH6.0～6.5
- (3) 元肥は定植 15 日前に全層施用し、持続的な長期間の肥効が期待できるように緩効性肥料を主とする。
- (4) 2 追以降は液肥を使用し、多用をつつしむ。

- (5) 専用の肥効調節型肥料を用いた全量元肥栽培では窒素成分量の 15% 程度が削減可能である。

8. タマネギ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 6,000kg (セットタマネギ 10 a 当たり 3,000kg)
- 4) 改善目標
 - (1) 冬期間の干害をさけ、増収できるよう、リン酸を元肥に施用し、切ワラを 2 月以降に散布する。
 - (2) 多収で貯蔵能力の高いたまねぎが生産できるよう施肥基準を励行する。
- 5) 施 肥 量

露地栽培 (10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥	
			1 追	2 追
窒 素	25kg	7.5kg	10kg	7.5kg
リ ン 酸	20	20	0	0
カ リ	20	10	10	0
施 用 期	—	11月中旬	1月上旬	3月上旬

マルチ栽培 (10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥
窒 素	22kg	22kg
リ ン 酸	18	18
カ リ	18	18
施 用 時 期	—	11月中旬

トンネル栽培 (10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥
窒 素	18kg	18kg
リ ン 酸	20	20
カ リ	20	20
施 用 時 期	—	11月上旬

秋冬どり栽培 (セット栽培) (10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥
窒 素	18kg	18kg
リ ン 酸	18	18
カ リ	18	18
施 用 時 期	—	8月中旬

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH6.0～6.5
- (3) 元肥は全面に全層施用する。
- (4) 追肥は施肥溝をきらずに施用し、覆土をかねて溝土を土入れする。
- (5) 止肥の時期はおくれないようにする。
- (6) 上場および圃場整備直後の水田は、リン酸を 30kg 以上施用する。

9. 小ネギ（周年）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……砂壤土、埴土
- 3) 収量目標……5,000kg（3作）
- 4) 改善目標

小ネギは浅根性で、根の酸素要求量が大きいのので、耕土は深く、良質な有機物によって保水性、通気性、排水性の良い土壌を作る。

耕起は丁寧に碎土し、畦面を均平に整地する。

また、適正播種量を守り、ムラのない適正なかん水量で発芽揃いを良くする。

5) 施 肥 量

(10a)

区 分	総量（成分）	元 肥	追 肥
窒 素	20kg	15kg	5kg
リ ン 酸	20	20	—
カ リ	20	20	—
施 用 期			本葉2葉頃

6) 施肥設計上の要点

- (1) 初作地では、窒素成分量（追肥を含む）30kg／10aを目安とする。
- (2) 好適 pH6.0～6.5、EC生育中 0.7ms 施肥前 0.3ms
- (3) 冬季の作期は長くなり、窒素吸収量も多くなるので、元肥窒素量は20kg／10aを目安とする。
- (4) 良質な堆肥等有機物を連用し、土壌物理性の維持を図る。
- (5) 一般に、連作圃場は窒素、塩基類、リン酸等が集積しているので、定期的な土壌診断の結果に基づき適正な土壌改良資材（塩基性資材等）による改善と適正な施肥を図る必要がある。
- (6) 専用の肥効調節型肥料を用いた場合、夏～夏秋季の作付では2作1回施肥で、窒素総量の10～20%程度が削減可能である。

10. 根深ネギ（春まき）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……沖積性の壤土～砂壤土
- 3) 収量目標……3,000kg
- 4) 改善目標

- (1) 軟白部を長くするため土寄せを行うので、土層が深く、排水、保水性に優れる土壌が適している。
- (2) 乾燥には比較的強いが多湿には弱く、過湿では根の発育を阻害し、生育が抑制されるので、排水対策等を講じる必要もある。

5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	1 追	2 追	3 追	4 追
窒 素	25kg	5kg	7.5kg	5kg	3.7kg	3.8kg
リ ン 酸	20	15	3	2	0	0
カ リ	20	10	2.5	2.5	2.5	2.5
施 用 期			定 植 後 20～30日	ほぼ、1月毎		

6) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH6.0～7.0
- (2) 土作り完熟堆肥を 10 a 当り 2 t と苦土石灰等の石灰資材を施用する。
- (3) 幼苗期の苗は肥料障害を受けやすいので、定植時など肥料が根に直接触れないようにする。
- (4) 追肥は畝間に施用し、その後、土寄せする。
- (5) 3年以上の連作では生育不良となりやすいので、完熟堆肥の施用や深耕を行ない、2年以上を休作する。

11. ワケギ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……1,000kg/10 a (1作)
- 4) 改善目標

植え付け後は十分な灌水を必要とするので、排水性が良く、耕土が深くて有機質に富む土壌が適している。

5) 施肥量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	20kg	15kg	5kg
リ ン 酸	20	20	
カ リ	20	15	5
施 用 期			草丈15～20cm時

6) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH6.0～7.0
- (2) 酸性に弱いので、石灰資材の施用により酸性の矯正を行う。
- (3) 幼根は肥料あたりしやすいので、元肥の過剰施用は避ける。
- (4) 完熟堆肥を 3～4 t /10 a 施用するとともに、深耕を行い、土づくりに努める。
- (5) 追肥は葉色を見ながら加減する。

12. アスパラガス（ハウス）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……3,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 土作りを徹底し、雨よけ施設の導入により秀品を増収する。
 - (2) 通風採光を良くし、株を充実させる。
 - (3) 排水を良くする。

5) 施 肥 量

(10 a)

1 年 生			2 年 生 以 降			
区 分	総量 (成分)	元 肥	区 分	総量 (成分)	冬 肥	追 肥
窒 素	21kg	21kg	窒 素	50kg	18kg	32kg
リ ン 酸	25	25	リ ン 酸	44	26	18
カ リ	20	20	カ リ	36	18	18

6) 施肥設計上の要点

- (1) 土壌診断に基づく施肥、土づくりに努める。特に家畜糞堆肥等を用いる場合は、土壌のECや連用によるカリの蓄積に注意し、過剰施用は避ける。
- (2) 収穫期間中は収穫量に見合った施肥を行い、その量は 250～300kg に対し窒素で約 3 kg とする。また最終は 10 月中旬までとする。
- (3) 好適 pH6.0～6.5
- (4) 専用の肥効調節型肥料を用いた全量元肥栽培が可能である。ただし、生育状況によっては追肥を考える。

13. ハクサイ（冬どり）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 8,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 生育期間は長いが、10 月～11 月の比較的温暖な時期に生育を促進できるよう元肥重点とする。
 - (2) 連作による地力低下防止のため、有機物の増施や石灰、微量元素剤の施用。

5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥	
			1 追	2 追
窒 素	30kg	20kg	5kg	5kg
リ ン 酸	20	20	0	0
カ リ	25	15	5	5
施 用 期	—	9月上旬	10月上旬	結 球 始

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH6.0～6.5
ただし、根こぶ病発生圃場は pH7.0～7.5 とする。
- (3) 収穫期の裂球を防止するため止肥を適期に施用する。
- (4) 土のリン吸収係数が高く（1,000 以上）有効態リン酸が少ないところ（7 mg 以下）ではリン酸を本施肥量の 50%増とする。

14. チンゲンサイ（周年栽培、施設）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……壤土～埴壤土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 2,500kg／作
- 4) 改善目標

土壌には幅広く適応するが、根は細く、深く伸長するので堆肥等施用で排水性良好な深い有効土層を確保する。

花芽分化は種子感応性で、13℃以下で分化し、その後の高温長日条件（10 時間以上）で抽台する。冬期には播種から生育初期の温度（日平均 15℃以上）確保が重要である。

5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥
窒 素	10kg	10kg
リ ン 酸	10	10
カ リ	10	10
施 用 期	—	定植前 5 日前

6) 施肥設計上の要点

- (1) 比較的酸性土壌に強いが、石灰の要求量が多いので苦土石灰等を 10 a 当り 100～200kg と堆肥を 3～4 t／年（2 回以上に分施）全層施用する。
- (2) 好適 pH6.0～6.5
ただし、根こぶ病発生圃場は pH7.0～7.5 とする。

- (3) 圃場は通風、排水の良好な場所が適する。
- (4) 一般平坦地では、夏秋出しで生育期間が 40～60 日と短いために、元肥中心の施肥とする。
- (5) 連作の場合は、元肥施用前に土壌診断を行ない、その量を決定する。

15. キャベツ（冬どり・秋どり）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……佐賀平坦、上場
- 2) 土 壌……埴壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 6,000kg
- 4) 改善目標……良質多収をするために元肥に重点をおいた施肥を行なう。
- 5) 施肥量（秋どり）

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥	
			1 追	2 追
窒 素	25kg	13kg	6kg	6kg
リ ン 酸	15	10	5	—
カ リ	20	10	5	5
施 用 期	—	定植10日前	定植10日後	結 球 始

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH6.0～6.5
ただし、根こぶ病発生圃場は pH7.0～7.5 とする。
- (3) 発育初期の高温乾燥による吸肥力の低下を防ぐため、畦上に敷ワラを励行する。
- (4) 土のリン酸吸収係数が高く（1,000 以上）有効態リン酸が少ないところ（7 mg 以下）ではリン酸を本施肥量の 50%増とする。
- (5) 冬どりキャベツは栽培期間が長いため、追肥回数を増やす。2 追は定植後 40～50 日目、3 追は結球始めに行なう。

16. ブロッコリー（早出し、普通）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……佐賀平坦、上場
- 2) 土 壌……埴壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 1,500kg（頂花蕾 600kg、側花蕾 900kg）
- 4) 改善目標……早出しの良質多収をする場合は元肥重点（7～8割）

5) 施肥量（頂花蕾、側花蕾どり）

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥			
			1 追	2 追	3 追	4 追
窒 素	25kg	12kg	3kg	3kg	4kg	3kg
リ ン 酸	20	16	2	2	—	—
カ リ	25	12	3	3	4	3
施 用 期	—	定植10日前	定植10日後	1 追30日後	2 追30日後	3 追30日後

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 p H6.0～6.5
ただし、根こぶ病発生圃場は pH7.0～7.5 とする。
- (3) 元肥は全面に施用し、深耕して全層に施用する。
- (4) 定植後の高温乾燥は根群の伸長が低下するので、畦面に敷ワラを励行する。
- (5) 頂花蕾収穫（早出）の場合は2追までとする。

17. レタス（夏秋、冬春）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……佐賀北部山間(夏秋)、県内平坦（冬春）
- 2) 土 壌……壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 生育期間が短いので元肥重点とし初期生育を促進する。
 - (2) 連作による地力低下防止のため、有機物の増肥と石灰、微量元素剤の施用。
- 5) 施肥量（夏秋レタス）

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥
窒 素	20kg	20kg
リ ン 酸	15	15
カ リ	20	20
施 用 期	—	定植5～7日前

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 p H6.0～6.5
- (3) 夏秋レタスの1年3作の場合は2作目を本施肥量の30%減とする。
- (4) 冬春レタスの袖ヶ浦については、本施肥量の10～20%減とする。

18. ホウレンソウ（雨よけ）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……佐賀北部山間、佐賀平坦
- 2) 土 壌……砂壤土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg（3作）
- 4) 改善目標
 - (1) 一斉発芽と揃いを良くし順調に生育させるため、土づくり、土壌水分の保持に努める。
 - (2) 夏季の高温時は、寒冷紗等を張り温度を下げる。
- 5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥
窒 素	15kg	15kg
リ ン 酸	20	20
カ リ	9	9

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (2) 好適 pH 6.0～7.0、栽培期間中の好適 EC 0.5ms
 - (3) 2作目より土壌診断結果に基づき施肥する。
 - (4) 秋まき露地栽培は元肥のカリを 15kg とする。追肥は本葉 3～5 枚時及び 10 枚時の 2 回行う。1 回の追肥量は窒素で 3 kg とし、硝酸態窒素とする。

19. バレイショ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……上場
- 2) 土 壌……埴土、埴壤土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 春バレイショでは、肥料の吸収が早まるように局所施肥等を行い、初期生育を促進する。
- 5) 施 肥 量

秋バレイショ

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	20kg	15kg	5kg
リ ン 酸	25	25	—
カ リ	20	15	5
施 用 期	—	定植10日前	萌 芽 始

春バレイショ(マルチ)

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥
窒 素	18kg	18kg
リ ン 酸	25	25
カ リ	18	18
施 用 期	—	定植10日前

- 6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 強酸性の圃場は石灰類の施用により適正な pH（好適 pH5.0）に矯正する。ただし、そうか病の発生は pH5.2 以上で多くなるため、発生圃場の pH は 4.7 前後とする。

20. ショウガ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……杵島山麓、多良岳、七山
- 2) 土 壌……埴壤土、埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg
- 4) 改善目標
堆肥等の有機物の施用による地力の維持
- 5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	1 追	2 追
窒 素	30kg	15kg	7.5kg	7.5kg
リ ン 酸	20	20	—	—
カ リ	30	15	7.5	7.5
施 用 期	—	植付10日前	萌芽揃い後	7月下旬

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (2) 好適 pH6.0～6.5
 - (3) 追肥は畦の両肩の部分に施し、土寄せをかねて覆土する。
 - (4) ショウガの根群は分布が浅く特に乾燥に弱いので 2 追終了後は敷ワラを多用し保水につとめる。

21. サトイモ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……佐賀北部山間、天山松浦山麓、上場
- 2) 土 壌……壤土～埴壤土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 追肥や土寄せ作業は適期に行い、収量の安定と品質の向上を図る。
 - (2) 水田作の場合は土層改良を行い、排水性を高め、根ぐされ等による生育障害を防止する。

5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	1 追	2 追
窒 素	25kg	15kg	5kg	5kg
リ ン 酸	15	12	3	—
カ リ	20	12	4	4
施 用 期	—	植付10日前	萌芽揃い後	7月上旬

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH 5.0～6.5
- (3) マルチ栽培は施肥量を 30%減とし、緩効性肥料などを主体とした全量元肥とする。
- (4) 土のリン酸吸収係数が高く（1,000 以上）有効態リン酸が少ないところ（7 mg 以下）ではリン酸を本施肥量の 50%増とする。

22. カンショ（早掘、普通）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……上場
- 2) 土 壌……埴土、埴壤土
- 3) 収量目標……10 a 当たり早掘り 1,500kg、普通 2,000kg
- 4) 改善目標……健苗育成と適期植付並びに商品性の向上
- 5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥
窒 素	5kg	5kg
リ ン 酸	15	15
カ リ	20	20
施 用 期	—	定植 7 日前

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH 6.0～6.5
- (3) 元肥は全面に全層施用する。
- (4) 前作の残肥や堆肥の種類によっては、元肥量に注意する。

23. レンコン [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……白石平坦
- 2) 土 壌……埴 土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg

4) 改善目標

腐敗病発生のおそれのある地帯は、冬期に湛水しておく。

5) 施肥量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	35kg	28kg	7kg
リ ン 酸	25	25	—
カ リ	35	28	7
施 用 期	—	植付15日前	6月上旬

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 腐敗病の防除のため、元肥に石灰窒素を用いる場合は植付 30 日以前とする。
- (3) 好適 pH 5.5～6.5
- (4) 新植田は窒素を 10～20%増施する。
- (5) ハウス栽培では全量元肥とし、窒素 15～17kg、リン酸 20～25kg、カリ 20～25kg とする。

24. スイートコーン（普通、トンネル）[\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……県内一円

2) 土 壌……砂壤土～埴土

3) 収量目標……10 a 当たり 1,500kg

4) 改善目標

土壌の適応性は広いが、深根性作物であるため、土層を深く保ち、低湿地では高畦とし排水条件を整備する。微量元素の欠乏がないよう堆肥の施用を行う。

5) 施肥量（トンネル）

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	1 追	2 追
窒 素	25kg	18kg	4kg	3kg
リ ン 酸	20	20	—	—
カ リ	25	18	4	3
施 用 期	—	—	播種後40日	1 追後20日

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH 5.5～6.5
- (3) 雌穂抽出時期の乾燥肥切れは、収量品質の低下となる。
- (4) 露地栽培では本施肥量の 30%増とする。

25. エンドウ(普通、露地抑制) [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 2,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 気鞘期以後の排水に留意し、後半の叢生維持に努める。
 - (2) 連作をさけ適期播種を行い越冬時の耐寒性をつける。
- 5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	1 追	2 追
窒 素	6kg	4kg	1kg	1kg
リ ン 酸	10	10	—	—
カ リ	10	7	1.5	1.5
施 用 期	—	—	越 冬 前	開 花 期

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (2) 好適 pH 6.0～6.5

26. ソラマメ (普通) [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 1,000kg
- 4) 改善目標

必ずマルチ高畦栽培として、着莢期以後の排水を良くし後半の草勢維持に努める。
- 5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	1 肥
窒 素	7kg	4kg	3kg
リ ン 酸	10	10	—
カ リ	10	6	4

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (2) 好適 pH 6.0～6.5
 - (3) カリ不足は後半の生育を阻害し、地上部の枯れ上りが早い。

27. モロヘイヤ（秋冬、春夏）[〔目次に戻る〕](#)

- 1) 地 域……天山松浦
- 2) 土 壌……砂壤土～埴壤土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 1,500～2,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 冬期の草勢低下を防ぐため、電照や加温を行う。
 - (2) 土壌水分や施肥の適正化に努め、根傷みを起こさないようにする。
 - (3) 排水性のよい圃場で栽培する。
- 5) 施 肥 量（施設）

(10 a)

区 分	総量（成分）	元 肥	追 肥
窒 素	55kg	24kg	1 回当たり3kg以内とする
リ ン 酸	40	24	
カ リ	40	24	1 回当たり3kg以内とする
施 用 期		定植10～20日前	

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (2) 好適 p H 6.0～6.5
 - (3) 冬期の草勢低下や根傷みを防止し、根の活性を高めるため、土づくりに努める。
 - (4) 窒素切れと土壌の乾燥は禁物なので、追肥は適宜遅れないように施用する。
 - (5) 低温期のガス害に注意する。

28. パセリ（夏秋）[〔目次に戻る〕](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……埴壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 2,500kg
- 4) 改善目標

発芽や生育適温は 15～20℃で、25℃以上では発芽不良や生育は徒長傾向となり、品質も低下するので施設の温度管理に注意する。

耕土が深く、通気性や排水性のよい土壌が好ましい。また、有機質に富んだ保水力のある肥沃な土壌が適する。夏秋どりで地下水位の高い圃場は暗渠等による排水対策を実施しておく。

5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	1 追	2 追	3 追
窒 素	60kg	26kg	15kg	10kg	9kg
リ ン 酸	40	26	9	2	3
カ リ	40	22	9	6	3
施 用 期			10葉期以降～		

6) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 p H6.0～6.5
- (2) 直根性であるので、有機物を 10 a 当り 3 ～ 4 t 施用し、深耕を行ない、排水性の良い膨軟な土壌とする。
- (3) 元肥は土壌診断結果に基づき、1 追は間引き後に施用する。その後の追肥量は生育に応じ、適宜調整する。
- (4) 高温、乾燥には弱いので、適宜かん水を行ない、地温上昇と乾燥を防ぐ。

29. コマツナ（雨よけ）[\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……佐賀平坦、佐賀北部山間

2) 土 壌……壤土～埴土

3) 収量目標……10 a 当たり 2,000kg

4) 改善目標

土壌には幅広く適応するが、有機質に富む粘質な土壌か沖積層の壤土地帯が適する。
保水性や排水性が良好な土壌を作るため、堆肥の施用等による土づくりに努める。

5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	追 肥 1	追 肥 2
窒 素	15kg	7kg	4kg	4kg
リ ン 酸	10	10	0	0
カ リ	18	9	4.5	4.5
施 用 期				

6) 施肥設計上の要点

- (1) 比較的酸性土壌には強いが、石灰の要求量が高い野菜に入るので、苦土石灰等の石灰資材を 10 a 当たり 100～200kg 程度施用する。
- (2) 好適 p H5.0～6.7
- (3) 良質な堆肥等の有機物の施用による土づくりに努める。

30. スイカ（半促成、露地）[\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……上場、天山松浦、国見山麓、佐賀平坦、白石平坦

2) 土 壌……砂壤土～埴土

3) 収量目標……10 a 当たり 5,000～6,000kg

4) 改善目標

立地条件を考慮し、スイカの生育相によく合致した合理的施肥の実施によって蔓ボケ現象を防止し、良質のものを多収する。

5) 施肥量（露地）

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥		
			1 追	2 追	3 追
窒 素	20kg	6kg	2kg	5kg	7kg
リ ン 酸	15	13	2	0	0
カ リ	15	4.5	1.5	4	5
施 用 期	—	定植20日前	定植直後	着 果 後	玉 肥

6) 施肥設計上の要点

(1) 好適 pH5.8～6.8

(2) 緩効性肥料を主とする場合は元肥に窒素の60%を施す。着果前は特に過窒素にならないよう注意する。

(3) 接木スイカの場合は本基準より20%減とする。

(4) 土の磷酸吸収係数が高く（1,000以上）有効態磷酸が少ないところ（7mg以下）では磷酸を本施肥量の50%増とする。

31. メロン（半促成）[\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……県一円

2) 土 壌……壤土～埴土

3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg

4) 改善目標

メロンの生育相によく合致した土壌水分管理と合理的な施肥の改善によって蔓ボケ現象を防止、良質のものを多収する。

5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	15kg	7.5kg	7.5kg
リ ン 酸	10	10	0
カ リ	10	5	5
施 用 期	—	定植10日前	着 果 直 後

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH 6.0～6.5
- (3) 元肥は緩効性肥料を主体とするのがよい。着果後は過窒素にならないように注意する。
- (4) 追肥は生育に応じて蔓先に施し、土とよく混和して土をよせ、うね幅をひろげる。
- (5) 接木の場合は本施肥量より 20%減とする。
- (6) ネットメロン類は本施肥量より 20%減（追肥）とする。
- (7) 一番果のみの収穫の場合は追肥を 50%減とする。
- (8) 二作型の場合、秋メロンは元肥無施用とする。

32. カボチャ（抑制、トンネル、普通）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……白石平坦、上場、天山松浦、佐賀平坦
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……1,300kg
- 4) 改善目標

健苗育成に努め植痛みを少なくし、朝早く人工交配を行い確実に着果させ蔓ボケ現象を防ぐ。

5) 施肥量

抑制 (10 a)				トンネル、普通		
区 分	総量 (成分)	元 肥	追 肥	総量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	12kg	7kg	5kg	19kg	13kg	6kg
リ ン 酸	7	7	—	13	13	—
カ リ	12	7	5	19	13	6
施 用 期	—	—	着 果 期	—	—	着 果 期

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH 5.0～6.5

33. インゲン（抑制、半促成）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 2,000～3,000kg
- 4) 改善目標

過繁茂による結実不良に注意する。

5) 施肥量

矮性種

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	20kg	15kg	5kg
リ ン 酸	15	15	0
カ リ	20	15	5
施 用 期	—	播種 5 日前	開花期～収穫期

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 p H6.0～6.5
- (3) 元肥は全面に全層施肥とする。

34. ニンニク（普通）[\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……上場

2) 土 壌……埴壌土～埴土

3) 収量目標……10 a 当たり 1,500kg

4) 改善目標

- (1) 土壌改良のための堆きゅう肥を必ず施用する。
- (2) 増収と品質向上のためマルチ栽培を行う。
- (3) 後期追肥に起因する二次分球防止

5) 施肥量

(嘉定種)

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	1 追	2 追
窒 素	22kg	18kg	2kg	2kg
リ ン 酸	28	22	3	3
カ リ	26	20	3	3
施 用 期	—	定植10日前	11月中旬～12月上旬	1月中旬～1月下旬

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 p H6.0～6.5
- (3) 追肥のおくれは二次分球の原因となるので必ず、1月中旬までに施用を終わる。
- (4) 元肥は全面に全層施用する。
- (5) マルチ栽培の場合は全量元肥とし窒素は本施肥量の30%減とする。
- (6) 追肥1・2は土入れと同時にこなう。
- (7) 土のリン酸吸収係数が高く(1,000以上)有効態リン酸が少ないところ(7mg以下)ではリン酸を本施肥量の50%増とする。